

伝夢窓疎石撰『二十三問答』について

余 新星

一、はじめに

本稿は、夢窓疎石（1275–1351）の撰述として伝わる『二十三問答』について、その伝本と思想内容を概観した上で、同書が果たして夢窓の真撰であるか否かを検証するものである。

夢窓疎石は鎌倉末期から室町初期にかけて活躍した臨済宗の傑僧である。対立と動乱に満ちた時代の中で、彼は公家と武家との両方より篤い信仰を受けて八面六臂の働きを示し、日本における禅宗の定着と興隆に大きく寄与した。その甚大な功績により、夢窓疎石は生前、夢窓・正覚・心宗という三つの国師号を、没後に普濟・玄猷・仏統・大円という四つの国師号を与えられ、絶大な尊崇を集めた。

夢窓の著述としては、『夢窓国師語録』・『夢中問答集』・『谷響集』・『夢窓国師和歌集』などが残っている。これらのほかに、『二十三問答』という漢字仮名交じり文で記された法語も、伝統的に夢窓に帰せられてきた。

『二十三問答』は写本や版本が数多く伝存し¹、受容の広汎さが示唆される。そして、明治二十九年（1896）に「禅宗」編輯局により編纂され、京都の貝葉書院から刊行された『校訂箋注・禅門法語全集』の第四篇には『二十三問答』が収録され、さらに大正十年（1921）六月に光融館から発行された山田孝道校訂の『禅門法語集』にも同法語が記載され、現代まで長く読み継がれてきた。

貝葉書院や光融館から刊行された『二十三問答』の活字テキストは、標題の次行に撰者を夢窓国師こと夢窓疎石だと提示している²が、同書の成

¹ 『二十三問答』の諸本については、後文で詳述する。

² 貝葉書院『校訂箋注・禅門法語全集』第四篇 p.4、光融館『禅門法語集』上巻 p.15。そして、小野・丸山『仏書解説大辞典』（1988年）、国書研究室『国書総目録』（1989年）などの辞書類においても、『二十三問答』の著者が夢窓疎石だと記されている。また、これらの記載を承けて、夢窓に関する先行研究も『二十三問答』を

立を記す序文や奥書などが含まれておらず、撰者に関する具体的な根拠は示されていない。さらに、『二十三問答』からは、夢窓の真撰であることが確実な『夢中間答集』と『谷響集』という二つの仮名法語とは大きくかけ離れる内容が見出される。

そこで以下、(1)『二十三問答』の伝本と思想内容を概観した上で、(2)『二十三問答』と夢窓の真撰である『夢中間答集』・『谷響集』との異同について考察を行い、それにより同書の撰述者を夢窓とする見方を再考する。

二、『二十三問答』の解題と伝本

2.1 解題

冒頭に述べた貝葉書院刊行の『校訂箋注・禅門法語全集』第四篇(1896)においては、『二十三問答』の解題について「本書は夢想(窓)国師が悟道の綱要二十三を問答体に示されたるもの蓋し簡にし明、頗る初心の人に益あるもの也」³と記されている。そして、光融館から発行された山田孝道校訂の『禅門法語集』上巻(1921)における『二十三問答』の解題では、「二十三問答は、夢窓国師が道俗の問いに応じて垂示せられたるものにて、はなはだ老婆親切なれば、初めて門戸を窺ふの士は、先づ此書を一読せざるべからず」⁴と記される。つまり、いずれも、夢窓が初学者にも分かりやすいように仮名で禅の教えを開示したものが『二十三問答』であると解説する。また、小野玄妙・丸山孝雄編集の『仏書解説大辞典』における「二十三問答」の項では、同書を夢窓疎石の撰述とし、「道俗の所問に応じて仏法の大意を垂示したるものにして、其の所説極めて親切なるを以て、禅道の門戸を窺わはんとする者は、必ず一読すべき良書である」との解説が施され

夢窓の著述だと見なしてきた。例えば、柳田 [1977:392] において、夢窓の著作として『夢窓国師二十三問答』が挙げられ、それについての解題も施されている。竹貫 [2012:7] には、「夢窓疎石の著として『夢窓国師語録』、『夢中間答集』、『谷響集』、『臨川家訓』(『臨川寺家訓』)、『三会院遺誡』、『西山夜話』、『臨幸私記』などをはじめ、『夢窓国師仮名法語』と『夢窓国師二十三問答』とよばれる仮名法語がある」と記されている。

³ 『二十三問答』解題、貝葉書院本 p.1。

⁴ 『二十三問答』解題、至言社本 p.13。

ている。これが前に引用した光融館刊行の山田孝道校訂版における解題をそのまま踏襲していることは明らかである。

これらの解題はいずれも、『二十三問答』は夢窓が初学者にも分かりやすいように仮名交じり文で禅の教えを説き示したものだとして解説している。しかしながら、これらは後人の説に過ぎず、夢窓が生きた時代に遡れる根拠は示されていない。

2.2 『二十三問答』の伝本とその書誌

『二十三問答』には、上述した貝葉書院と光融館により刊行された活字版⁵に先だって、江戸時代にできた写本や木版本が複数現存している。『国書総目録』によると、同書には元和四年（1618）の写本が残り、それは駒澤大学図書館に収蔵されている⁶。そして、現存する版本については以下の数点が挙げられている⁷。

- ・元和寛永（1615-1644）古活字版
- ・正保二（1645）版
- ・正保五（1648）版
- ・慶安元（1648）版

⁵ 『二十三問答』の活字版は他には、昭和六年（1931）六月に発行された『高僧名著全集』第十六巻に収められたものがある。

⁶ この写本は現在、駒澤大学図書館の電子貴重書書庫からオンラインで閲覧することが可能になっている。<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/collections/?lang=0>（2021年8月5日参照）。

⁷ なお、『国書総目録』の継承・発展を目指して国文学研究資料館から構築・公開された「日本古典籍総合目録データベース」（URL：http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_W_49581、2022年5月28日参照）においては、『二十三問答』の著作詳細に関して、「著者」は「夢窓疎石」と記され、「国書所在」は以下の通りに記される。

【写】駒沢（元和四安日明岸写）。【版】＜元和寛永古活字版＞天理、旧安田；＜正保二版＞加藤正俊；＜正保五版＞京大、東北大狩野、東洋大；＜慶安元版＞国会、駒沢、無窮神習；＜万治二版＞京大頼原、駒沢、東大、雲泉；＜寛文六版＞駒沢、高野山金剛三昧院；＜安永七版（「二十三問答並山姥謡」）＞京大頼原、駒沢、立正、積翠；＜刊年不明＞京大、駒沢、早大、東大、正宗、〔補遺〕竜谷。【複】〔活〕高僧名著全集一六・校訂箋註禪門法語全集四・禪門法語集上

とあり、『国書総目録』において記された写本や版本の種類と一致している。

- ・万治二（1659）版
- ・寛文六（1666）版
- ・安永七（1778）版
- ・刊年不明の版

また、小野玄妙・丸山孝雄編集の『仏書解説大辞典』では、『二十三問答』の版本について、慶安元刊・正保五刊・慶安元年後刷という三つの版本を挙げている。『国書総目録』の記載と合わせて見れば、現存する『二十三問答』の写本や版本は概して江戸期以降のものだと分かる。

『国書総目録』に記された写本と版本の悉皆調査が叶えていないものの、筆者は元和四年の写本と、慶安元版・万治二版・寛文六版・安永七（A・B・C）版という七種類の伝本について確認することができた。上記七本の書誌情報は、以下のとおりである。

I 元和四写（駒澤大学図書館蔵本）

- ・形態：写本、一冊、袋綴装、四つ目綴
- ・寸法：縦 25.3 糎、横 18 糎
- ・丁数：26 丁
- ・本文：半葉 7 行、おおむね 24 字
- ・外題：明記なし、表紙に「きく事にしうぢあくせず」と記される
- ・奥書：元和四年 津ちのえむま 閏三月廿七日書乎 筆者 湊兵部入道 安日明岸居士
- ・構成：目録（見出し：「もんどうのもくろく」、1 丁オ）、問答 23 則

II 慶安元版（駒澤大学図書館蔵本）

- ・形態：刻本、一冊、袋綴装、四つ目綴
- ・寸法：縦 27 糎、横 18 糎
- ・丁数：30 丁
- ・本文：半葉 11 行、おおむね 28 字
- ・外題：廿三問答
- ・刊記：慶安元年 林甚左衛門刊板

- ・構成：目録（見出し：「廿三問答目録」、1丁オ）、問答23則、法語4則

Ⅲ 万治二版（駒澤大学図書館蔵本）

- ・形態：刻本、一冊、袋綴装、四つ目綴
- ・寸法：縦27糎、横18糎
- ・丁数：22丁
- ・本文：半葉14行、おおむね30字
- ・外題：廿三問答
- ・刊記：萬治二年仲夏吉辰 松會開板
- ・構成：目録（見出し：「廿三問答目録」、1丁オ）、問答23則、法語4則

Ⅳ 寛文六版（駒澤大学図書館蔵本）

- ・形態：刻本、一冊、袋綴装、四つ目綴
- ・寸法：縦27糎、横19糎
- ・丁数：20丁
- ・本文：半葉16行、おおむね30字
- ・外題：廿三問答
- ・刊記：寛文六年丙午年二月吉日 山本九左衛板
- ・構成：目録（見出し：「廿三問答目録」、1丁オ）、問答23則、法語4則

Ⅴ 安永七版

Ⅴ—1 安永七版 A 本（駒澤大学図書館蔵本）

- ・形態：刻本、一冊、袋綴装、四つ目綴
- ・寸法：縦25.5糎、横18糎
- ・丁数：31丁
- ・本文：半葉13行、おおむね25字

- ・外題：二十三問答
- ・刊記：安永七年戊八月 八文字仙治郎 炭屋勘兵衛 山本長兵衛
- ・構成：目録（見出し：「廿三問答目録」、1丁オ）、問答 23 則、法語 4 則、澤庵禪師山姥五十首和歌

V—2 安永七版 B 本（駒澤大学図書館蔵本）

- ・外題：心源 悟道二十三問答 並山姥謡 澤庵禪師注入
- ・刊記：安永七年戊八月 京師六角通寺町西_下入町 禪家書林 柳枝軒 小川多左衛門刻
- ・構成：目録（見出し：「廿三問答目録」、1丁オ）、問答 23 則、法語 4 則、澤庵禪師山姥五十首和歌

V—3 安永七版 C 本（筆者所持本）

- ・外題：夢窓国師問答書并法語 澤庵禪師山姥五十首和歌
- ・刊記：安永七年戊八月 八文字仙治郎 炭屋勘兵衛 山本長兵衛
- ・構成：目録（見出し：「夢窓国師問答書并法語」、1丁オ）、問答 23 則、法語 4 則、澤庵禪師山姥五十首和歌

上記七種類の伝本に対して比較検証を行いその変遷を追いかければ、次のことが明らかになった。(イ)現存する最も古い伝本は元和四写本であり、その外題・奥書・構成などから『二十三問答』の雛形に関して貴重な情報が示唆される。『二十三問答』という書名はテキスト成立の当初から付けられていたわけではなく、のちにテキストが流通していく中で付されたものだと窺い知れよう。それに元和四写本の中には、本文の内容を含めて、夢窓疎石に関連付けられる情報が皆無である。(ロ)慶安元版⁸から、元和四写本にあった 23 則の問答に続いて、4 則の法語（「修行の道をたつぬる事」・「生死輪廻の由来の事」・「坐禪の教の事」・「夢窓国師法語の事」）が附加されて一冊のテキストとなし、「廿三問答」という書名で流通した。

⁸ 現段階で筆者はまだ目にする機会に恵まれていない元和寛永古活字版、または正保二版・正保五版からであった可能性もある。

新たに附加された4則の法語には夢窓と関連する内容があった。(ハ) 安永七版からは、万治二版の二十三問答（問答23則・法語4則）の後に沢庵禪師五十首和歌を附加してそれらを合綴した。そしてこの合本は、発行する本屋により、「二十三問答」、「心源悟道二十三問答 並山姥謡 澤庵禪師注入」、「夢窓国師問答書并法語」などといった様々な外題を付けられて流通した。

このような伝本の変遷について、以下の表に纏めることができる。

	開版年	構成	外題
段階(一)	I 元和四 (1618) 年	問答 (23 則)	明記なし (「きく事にしうぢやくせず」)
段階(二)	II 慶安元 (1648) 年	問答 (23 則) + 法語 (4 則)	『廿三問答』
	III 万治二 (1659) 年	問答 (23 則) + 法語 (4 則)	『廿三問答』
	IV 寛文六 (1666) 年	問答 (23 則) + 法語 (4 則)	『廿三問答』
段階(三)	V 安永七 (1778) 年	問答 (23 則) + 法語 (4 則) + 澤庵和歌 (50 首)	A 『二十三問答』
			B 『心源悟道二十三問答 並山姥謡』
			C 『夢窓国師問答書并法語 澤庵禪師山姥五十首和歌』

三、『二十三問答』の思想概要

『二十三問答』はその題目の言葉通り、二十三の問答から構成される。各問答にはそれぞれ章タイトルが付けられている。

一、「道心起こすべき事」、二、「一心のむけやうの事」、三、「よしあしかぎりなき事」、四、「よしあしの源の事」、五、「根本のむまれしなざる事」、六、「仏生まれ死にたまはぬ事」、七、「仏は人にかはりたる事」、八、「仏むしけらとなる事」、九、「妄念による事」、十、「現在の果を見て過去未来を知る事」、十一、「善根に有漏無漏のかはりある事」、十二、「浄土をねかふ事」、十三、「懺悔に罪をほろぶる事」、十四、「懺悔に二つある事」、十五、「誓願の事」、十六、「廻向の事」、十七、「臨終の事」、十八、「何事もおもはずいたづらなるはあしき事」、十九、「祈

禱の事」、二十、「仏と菩薩行の中にいづれ勝劣の事」、廿一、「心のなきを仏にする事」、廿二、「心のおこるをいかゝすべき事」、廿三、「私のことばにあらず皆經文なる事」、

これらは各章の中心内容を要領よくまとめるものとなっている。

この中で、第一章～第九章は「心・仏・衆生」をめぐって論述を展開している。そして第十章～第十九章では、因果応報・有漏無漏の善根・浄土・懺悔・誓願・廻向・臨終・祈禱といった具体的なテーマをめぐって解説している。また第二十章～第二十四章は「無心無念」をめぐって説示を行っている。

まず第一章では修道の前提となる道心が説示される。「道心に浅き深きのかはりさまゝありといへども、あさゝと御心得候はんずるは、世の中の常なき理を知りて、名利をすつる心也」（至本、十五頁）と説かれ、無常の理を知り名利を捨てる心が道心だと平明に解釈されている。そして浮世のありとあらゆる事が思う通りになることがないのだと弁えて、仏道に入りたいと発心し、仏の教えを信じるのが道心を起こすことだ（同十五頁）と説かれる。

それに続いて、心をめぐって『二十三問答』の主体部分となる論述を展開していく。『二十三問答』では、仏になるのも地獄に落ちるのも一心の向け方⁹によるものだとされ、仏になるためには、諸々の悪い事をせず、様々な善いことを行うように心掛けるべきだと説かれる。さらに善い事や悪い事を為す源は、心であると明示される（至本、十六頁）。そして心には種々様々あるが、『二十三問答』では特に二種類の心を取り上げて説示を行った。一つには、白や黒、西と東などを分別し、諸般の物事を思い計らう心である。この心は真実の心ではなく、仮に人の身体に宿るのみである。二つには、我と人を分け隔てず、善悪などの二元対立を超えたところの心である

⁹ 「一心」については、『二十三問答』ではさらに敷衍することがなかった。ここでは単純に我々の心のあり方と理解しても意味が通じる。しかし、『大乘起信論』などにおいて展開されるような哲学的な意味での一切の根源としての原初的な心と捉えたほうが、後の文脈——「(善悪をなす) 源は心なり」（至本、十六頁）、「この仏（根本の仏）をだに知りぬれば、我か心のうちに残る仏なくましますべし。菩薩も文殊、弥勒、薬王、観音、地藏、虚空蔵、普賢その外一切の菩薩みな一心の名にて候」（至本、三四頁）——と協調が取れそうに思われる。

（至本、十六～十七頁）。『二十三問答』においては、「仏心」という鍵概念を用いて後者を説明している。物事を区別立てて、あれこれと思ひ計らう分別の心に対し、仏心は、善も悪もすべて思ひはかることなく、一切の分別対立を超えて何の思念も生じない時の心である。

この心は法界にあまねくして、ひとりぬしもなし、いできもせず、うせもせず、うつりかはることなくして、たれものこらすもちたる也、是れを佛心と申し候。さればよしともあしとも思はず、何の心も何の念もなさぬ心のむげやうによりて、佛になるとは申す也。（『二十三問答』至本、十七頁）

この心は法界に遍くゆきわたり、一人として所有主なる者は存在せず¹⁰、生じてくることも消えて滅していくこともなく、しかも誰もが有している

¹⁰ 『二十三問答』では、類似する以下の文章も見られる。①「心も法界の心なれば主なし。よろづ執着の心なく、二念をつがさるを佛とは申す也」（至本、十九頁）。②「根本佛とは別にましゝて、その佛の心に妄念いできて、衆生になりたるにてはなし、たゞぬしなき法界に妄念おこりて衆生となり、念なくてそのまゝ法界なれば、佛となづけたるなり」（同、二二頁）。③「悪業煩惱の念はおこり候とも、たゞ誠ならず、かりなる物なりと信してぬしにならず、あとなく法界にひとしく心をもつべきにて候」（同、三七頁）。④「真如一理とは、わか心仏にて法界なることなり。……女人悪人へだてなくして、たゞ一心法界かはりなし」（同、三九頁）。

そして思慮分別のない心を法界に同定したのは、以下の『大乘起信論』の文章を想起させる。「心真如とは、即ち是れ一法界にして大総相の法門の体なり。所謂、心性は不生不滅なり。一切の諸法は唯だ妄念に依りて差別有り、若し妄念を離れば則ち一切境界の相は無きなり。心真如者、即是一法界大總相法門體。所謂心性不生不滅、一切諸法唯依妄念而有差別、若離妄念、則無一切境界之相」（大正三二、五七六上）。また法界を「ぬしなし」と係結んだことについて考えるに、以下の『摩訶止観』の文章からヒントが得られよう。「いかんが即空なるや。並びに縁より生ず、縁より生ずるは即ち主なし、主無くんば即ち空なり。云何即空。並從縁生、縁生即無主、無主即空」（大正四六、八下）とあるように、縁（条件）の結び合いによって成立するものであるゆえに、所有者が存在しないのだと理解できよう。事実、『二十三問答』でもこのような理筋から法界について解説を行っているのだ。「されどもまことに死するにあらず、たゞ父母の縁によりて見え、かりにし縁つくれば、もとの如くなるまで也。……実には生れも死にもせず、生るゝとても来るものなく、死するとて去るものなし。土も火も風も水も法界のきなれば、とりわけてぬしなし、心も法界の心なれば主なし」（至本、十九頁）。

ものである。これを仏心と言うのだ。そして善悪などの分別をせず、何の心も何の念も生じないように心を調えれば仏に成ると言うのだ。

逆に、我と人、善と悪など二元対立的に物事を思いはかり、妄念が次々と生じたり滅したりするのが衆生の心である。

又心は實の佛也、念のおこるは衆生なり、念なければ心やかて佛也、曇なければ月明なり。……念なくば衆生たゞ佛なるべきを、妄念さまゝあるゆゑに、さまゝのいやしきかたちとなるなり。(同上、二一～二二頁)

また心は真実の仏である。思念が起こるのは衆生である。思念がなければ心はそのまま仏である。それは恰も曇がなければ月が明らかであるようなものである、という。そして思念がなければ衆生がそのまま仏であるはずなのに、様々な妄念があるために、地獄・餓鬼・畜生・人・阿修羅・天道といった六道の衆生としての下位の存在となったのだと説かれている。

なお、仏と衆生との関係については以下のように述べている。

まことの仏と申すは、衆生と身の毛一筋ほどもかはらず、根本の心同じ物也、隔ありと思ふは、地獄に入る心にて候。(同上、二〇頁)

又佛の心も我等衆生をはなれず。たとへは月は佛の如し、くもりは衆生の如し、くもれともこんほん月はくらからず。(同上、二一～二二頁)

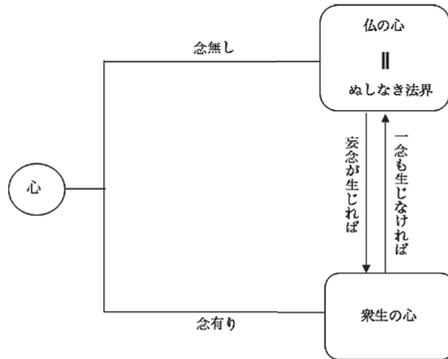
佛とはなれたる衆生あるべからず、一たび妄想あるによりて、業因をそへて過去の業によりて、この世又むくひありて、さまゝの形をうけ、六道にめぐることたえず、かなしまさらんや。(同上、二三頁)

真実の仏と言うのは、衆生とは身の毛一筋ほどの差異も存在せず、根本の心においては同じものだと説かれている。また、仏の心は我ら衆生を離れて（衆生の外に仏が別に）存在しているわけではない。譬えて言えば、月は仏のようで、曇りは衆生のようなものである。曇りがあっても根本（本来）の月は曇ることがない。そして衆生も仏と離れて存在することは決してあり得ないのだと説示されている。従って『二十三問答』では、仏の心

と衆生の心とは本質的に一つであると考えられている。

以上の検討をまとめると、『二十三問答』は、心を、物事を思い計らう思慮分別のある心と、思慮分別のない心とに分類した。物事を分別せずに何の思念もない心を「仏心」と呼び、さらにこのような一念も生じない時の心を「ぬしなき法界」に同定している。所有主のない法界から妄念が生じれば衆生となってしまうのであり、もし何の妄念も生じずにそのまま法界であれば、それが取りも直さず仏であるとされている。これが『二十三問答』に通底する思想的構造である。

この思想的構造を図示すると、以下のようになる。



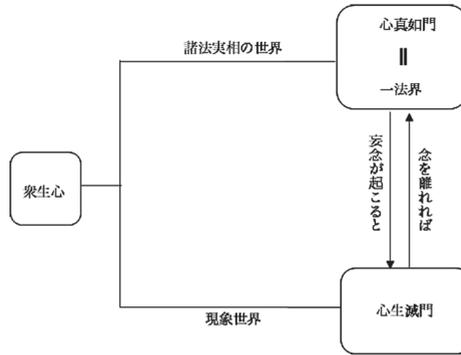
このような思考の方式は『大乘起信論』における思想構造と極めて類似している。

『大乘起信論』においては、衆生心¹¹を、心真如門と心生滅門という二つの側面から¹²分析し論を展開した。心真如門は、全ての存在の本質・本性

¹¹ 上記の『二十三問答』における「衆生の心」とは意味が異なる。ここの「衆生心」は、一切の世間法と出世間法を包摂する心である（「言うところの法は、謂ゆる衆生心なり。是の心は則ち一切の世間法・出世間法を摂す。（所言法者、謂衆生心、是心則攝一切世間法、出世間法）」大正三二、五七五下）。『二十三問答』に出ている「心」または「一心」に当たる。『二十三問答』において説かれる「衆生の心」は、六道輪廻を免れない衆生が現実的に有している妄念の纏わり付く心を指す。『大乘起信論』における心生滅門に相当するものである。

¹² 「一心の法に依りて二種の門有り。云何が二と為す。一には心真如門、二には心生滅門なり。（依一心法、有二種門。云何為二？一者、心真如門、二者、心生滅門）」（大正三二、五七六上）。

である真如の側面から見た衆生心である。これが第一義的なもので、ありとあらゆる事物に平等に行きわたり、増えたり減ったりすることがない¹³。そして心真如は、一法界¹⁴であってあらゆるものを包摂する全体の教えの本体だ¹⁵とされている。それに対し心生滅門は、生滅変化する現象世界の側面から見た衆生心である。しかしながら、心真如門と心生滅門とは相離れた別々のものではない。なぜなら、心の本性は生滅変化するのではないからである。一切の存在はただ妄念によって差別の相を現しただけであって、もし妄念を離れば、一切の境界の相もなくなるのだ¹⁶と説かれている。この基本的構造を図示すると、次のようになる。



『二十三問答』では『大乘起信論』からの直接的な引用は見当たらないものの、上記の分析を通じて、『二十三問答』の思想構造は『大乘起信論』

¹³ 『大乘起信論』：「一には体大、謂ゆる一切の法の真如は平等にして増減せざる故なり。（一者、體大、謂一切法真如平等不増減故）」（大正三二、五七五下）。

¹⁴ 唯一不二で、本来の真理が平等に行きわたり、しかもありとあらゆる事物を生み出す本源的世界である。

¹⁵ 「心真如とは、即ち是れ一法界にして大総相の法門の体なり。（心真如者、即是一法界大総相法門體）」（大正三二、五七六上）。

¹⁶ 『大乘起信論』：「是の二種の門は皆な各一切の法を総摂す。此の義は云何。是の二門は相い離れざるを以ての故なり。（是二種門、皆各總攝一切法。此義云何？以是二門不相離故）」（大正三二、五七六上）。「謂う所は、心性は不生不滅なり。一切の諸法は唯だ妄念に依りて差別あり。若し妄念を離れば、則ち一切の境界の相は無きなり。（所謂心性不生不滅、一切諸法唯依妄念而有差別。若離妄念、則無一切境界之相）」（大正三二、五七六上）。

における思想体系から影響を受けている可能性があると考えられる¹⁷。ただし『大乘起信論』において行われた体相用、本覚・始覚、心識などの議論は、『二十三問答』では言及されていない。『二十三問答』は、『大乘起信論』における「一心二門」の基本構造を援用しながらも、心真如門・心生滅門といった形而上学的な概念に取り代えてより平明な言葉によって二種類の心を論じ、その思想の骨格としたのだと考えられよう。

四、『二十三問答』と『夢中間答集』・『谷響集』との相違

『二十三問答』の成立時期について、『国書総目録』は観応頃、小野・丸山『仏書解説大辞典』は観応改元頃と記している。この場合、夢窓疎石が観応二年（1351年）に七十七歳で逝去したことを考えれば、『二十三問答』の成立は夢窓が辞世する年かその前年に当たり、夢窓の思想が最も円熟した最晩年のことになる。

他方で、康永元年（1341年、夢窓六十八歳）頃には夢窓の著述であることが確実な『夢中間答集』と『谷響集』という二つの仮名法語が刊行された。もし『二十三問答』が夢窓の真撰であるならば、その思想内容が『夢中間答集』や『谷響集』から大きく外れることはあまり起こりそうにない。しかしながら、これらを比較検討すると『二十三問答』が使用する概念、基本的な思想内容、個々の論題についての見解などといった多くの点において、『夢中間答集』・『谷響集』との大きな差異があることが確認される。

4.1 概念の違い

前に分析したように、『二十三問答』は、思慮分別のない心を「仏の心」

¹⁷ 『二十三問答』では、仏と衆生との関係を論じる際に、次のような譬喩を用いて説明を行った。「又佛は鏡のごとし、うつる影は衆生に似たり、鏡に影うつれども、根本鏡は者をきはらず。……また佛は水の如し、波は衆生に似たり、波たてども水は元の水にてかはらず。」（至本、二一～二二頁）。『大乘起信論』においても鏡・像や水・波の喩えが見られ、しかも有名である。二者の思想構造の類似性に合わせて考えれば、『二十三問答』における鏡・影や水・波などの喩えも『大乘起信論』から影響を受けた可能性があるかもしれない。ただし水波などの譬喩は、『楞伽経』をはじめ仏典の中には多く見られるので、譬喩に関してはあくまでも『大乘起信論』から受容した可能性があるとして提起するのみに留まりたい。

という概念によって表現している。そして仏の心の不生不滅・不変遍在という性質を取り立てて表現するために、『二十三問答』では「根本」を修飾語として用いて、「根本仏」・「根本まことの仏」などの概念を打ち出している。

もるゝことなく法界にあまねきわれらが心、則ち根本まことの佛にて、犬鳥虫までも皆佛と一つなり、色かたちあるをまことの佛とおもふべからず。(同上、二一頁)

根本佛とも衆生ともいふべき名もなし。根本佛としては別にましゝゝて、その佛の心に妄念いできて、衆生になりたるにてはなし、たゝぬしなき法界に妄念おこりて衆生となり、念なくてそのまゝ法界なれば、佛となづけたるなり。(同上、二二頁)

まことの佛のことは、まへにくはしく申しつる如く、衆生の心にあるなり。その佛は色もかたちもなく、大にもなくちいさき物にもなし、過去、現在、未來もなく、虚空の如くにていたらずといふ所なく、いきしになく、いやしくもなし、是れ根本の佛也。(同上、三四頁)

漏れることなく法界に遍くゆきわたる我らの心を取りも直さず根本真実の仏であり、犬や鳥や虫までも皆全て仏と一つであるとされている。しかし根本仏とはいっても衆生の外に仏が存在し、その仏の心に妄念が生じてきて衆生になったのだというわけではない。ただ所有主のない法界に妄念が起こり衆生となったのであり、妄念が生じなくてそのまま法界であれば、仏と名づけたのである。真実の仏とは、衆生の心にあるのである。その仏は色も形もなく、大きい物でも小さい物でもない。過去・現在・未來もなく、虚空のようで至らないという所はなく、生まれることも死ぬこともなく、位が低いということもない。これが根本の仏だと解説されている。

教門との峻別を図り禅門の独自色を出すことが念頭に置かれているためであろうが、夢窓はその教示の中で「仏心」をはじめとする教理的な概念の使用を回避している。『夢中間答集』では「仏心」の使用回数は僅か四回のみで、しかもいずれも経典や教門の教えを引用したり解説したりする際に使われたもので、夢窓自身の思想を展開するために使用したわけでは

ない¹⁸。そして『谷響集』では「仏心」が全く使われていない。その代わりに、夢窓は『夢中間答集』や『谷響集』などにおいては、「本分の田地」（または略して「本分」とも言う）を中心概念として思想を展開している。

「本分の田地」とは一切の衆生に本来的に具わる円満な覚りの境地を意味する。それは「人々具足し、箇々円成す」るものだと言って、衆生ひとりひとりが誰しも不足なく十分に具えており、めいめい円満に成就しているものだと説かれている。本分の田地には凡聖・迷悟・淨穢といった分別が一切ないのであるが、無明の一念が生起して仏法世法・善念悪念といった種々の差別の相を現したのである。その夢幻のような分別妄想をすべて手放して、直に本分の田地に契合するのが禪門修行の宗旨である。

しかし『夢中間答集』と『谷響集』では類出する「本分の田地」・「本分」という中心概念は、『二十三問答』では全く使用されていない。そこで、このような概念の使用状況を整理すべく、筆者は『二十三問答』と『夢中間答集』や『谷響集』などにおける特徴的な用語を抽出し、これらの資料におけるそれらの用語の使用回数を調査して以下の表にまとめた¹⁹。

¹⁸ その四例は次の通りである。①教中ニ四句ヲ以テコレヲ判セリ。一ニハ唯有漏心。謂ユル凡夫外道ノ心ナリ。二ニハ唯無漏心。謂ユルニ乗心ナリ。三ニハ亦有漏亦無漏心。謂ユル菩薩心ナリ。四ニハ非有漏非無漏心。謂佛心ナリ。(M 勉本、一六頁)；②經中ニ佛力法力ヲアラス時。定業モ亦ヨク転ストイヘル文アリ。又佛力モ業力ニハカラストモイヘリ。……若人凡情ノ執着ニヨリテ命ヲノヘタク福ヲタモチタキ故ニ。祈ルナラハ。カヤウノ欲心ハ佛心ト冥号セサル故ニ感應アルヘカラス。(M 勉本、四六頁)；③然ルヲ。イマタ迷倒ノ見ヲハナレサル人ノ。即心即佛トイヘル語ニ随テ。解ヲ生シテ。喜怒哀樂ノ妄情。即是佛心ナリト談ス。其語ハ佛法ニ似タレトモ。其見ハ邪道ニコトナラス。(M 勉本、三三八頁)；④解脱上人其上ニ塔ヲ立テ。大師ト太子トノ兩ツノ御影ヲ。安置シ玉ヘリ。太子ノ説法明眼論ヲ。ツクラセ玉フ其中ニ云。南天ノ祖師。朕尔示シテ云ク。速ニ生死ヲイテムト思ハ。根本一乗ヲ學スヘシ。一乗ノ正義ト云ルハ佛心ナリ。又云。南天ノ祖師。佛法ヲ分テ二種トス。教内教外是ナリト云々(M 勉本、三三八頁)。

¹⁹ 『二十三問答』は至言社本、『夢中間答集』は勉誠社本、『谷響集』は内閣文庫蔵本、をそれぞれ用いて使用回数を計数した。ここでは、「本分」と「本分の田地」を異なる二つの用語として扱った。

	『二十三問答』	『夢中間答集』	『谷響集』
仏の心	7	4*	0
ぬしなき法界	2	0	0
一心法界	1	1	0
わか心法界	1	0	0
根本仏	5	0	0
根本の心	3	0	0
まことの仏	2	0	0
根本まことの仏	1	0	0
心仏	2	0	0
わか心仏	1	0	0
根本の衆生	1	0	0
本分の田地	0	17	3
本分	0	94	10
人々具足	0	15	1
箇々円成	0	8	1
放下	0	20	2
仏祖	0	16	4
禪	0	291	108

この計数の結果から、『二十三問答』は『夢中間答集』・『谷響集』とは大きく異なる術語体系を有していると言えよう。そして『二十三問答』における用語法は安定しておらず、「一心法界・わか心法界」や「まことの仏・根本仏・根本まことの仏・心仏・わか心仏」など、似通った概念を曖昧に使用するケースがしばしば見られる。これは円熟した思想体系にはあまり見られない特徴であろう。

本分の田地・本分・人々具足・箇々円成・放下などの、夢窓が『夢中間答集』と『谷響集』において自らの思想を展開するために使う用語は『二十三問答』においては全く使われていない。加えて、『夢中間答集』と『谷響集』には、禪門・禪宗・禪僧・坐禪・禪定などといった言葉が随所に見られるが、『二十三問答』には「禪」という文字さえ見当たらない。『二十三問答』が仮に禪門の法語だとしたら、これは実に異質なものだと言うべきであろう。

4.2 基本的な思想内容の違い

前に述べたように、『二十三問答』において表される思想的構造では、「ぬしなき法界」から妄念が生じて衆生となったわけで、妄念が生じなければ、そのままの法界がすなわち仏であるとされている。要するに一念も生じない時には「われらが心」＝「ぬしなき法界」＝「根本仏」という図式が成立する。従って、妄念が生じないことが成仏するための要だとされている。さて、妄念が起こったらどのように対処すべきかという課題について、『二十三問答』は次のように述べている。

（心のおこるをいかゞすべき事）心にかぶことうちらはひて、何の念もなきやうにと油断なく候はゞ、おのづから御悟あるべし。（至本、三八頁）

縁に触れて心に様々な妄念が起こった時の対処法として、『二十三問答』においては、心に浮かんできたものを払いのけて、何の念も生じないようにと油断なく用心し続ければ、自ずから悟りを開くことができるのだと説かれている。

これは「北宗」系の禅思想——妄念を除去することを通じて、衆生ひとり一人の内面に保ちながらも妄念・煩惱に覆われているために顕現できていない仏性を明らかにするという考え方——と類似するよう見受けられる。

しかし、迷いの原因となる妄念に関しては、『夢中間答集』では、凡・聖の分け隔てがない本分のところから妄念が生じてきて様々な差別の相を現すのだと説かれるが、妄念妄想を除去する作為に対しては否定的な姿勢を示している。

（諸縁ニ對スル時、常ニ此心ノウカフハ、過ナルヘシヤ）一切ヲ放下セヨト、申セハトテ、外道ニ乗ノ、悪念ヲ制シテ、起サシトスルニハ、同シカラス。サヤウニスル事ハ、血ヲ以テ血ヲアラフカ如シ。（M 勉本、二三三頁）

上の引文は「諸々の対象に触れた際に、常にこの心（念）が浮かんでく

るのは過ちであろうか」という質問に対する夢窓の回答である。一切のことを手放せと言っても、外道二乗の悪念を制御して起こさないようにすることとは同じではない。そのようなことは血を以て血を洗うようなものである、と言う。つまり、妄念を無くすように思い計らうのが二重の妄想になるのだと夢窓は考えている。

『夢中間答集』では、生じてきた妄念妄想への対処については、一切の分別妄想に対してはすべて思いはかつてはならならず、また特に何か取り組むこともなく、ただ手放せばそれで良いのだと示されている²⁰。この妄念への対処法が『二十三問答』におけるものとは大きくかけ離れていることは明瞭である。

そして、妄念のない心についても両書は異なる観点を示している。『二十三問答』には以下の文章がある。

心は実の佛也、念のおこるは衆生なり、念なければころやかて佛なり。(至本、二二頁)

前にも述べたように、『二十三問答』では、「念なき心—法界—仏」を原点として論理を展開している。妄念が起こってくるのは衆生であり、妄念がなければ心は取りも直さず仏であるとされている。従って、法界に等しい無念無心を極則だと見なしている。

それに対し『夢中間答集』では、「本分の田地」と言って衆生に本来的に具わる清浄なる悟りの境地を原点としている。

問：一切放下シテ、佛法世法ヲ、胸中ニオカスハ、コレヲ本分ノ田地ト、申スヘシヤ。 答：達磨大師ノ云、外ニ諸縁ヲオハス、内心アエクトナクシテ、心牆壁ノコトクナラハ、道ニ入ヘシト云々。大慧禪師、此語ヲ擧テ云、諸縁ヲ放下シテ、内心動セサルハ、道ニ入ル方便門ナリトイヘル意ナリ。若カヤウナル處ヲ、眞實ノ道ナリト思ハハ、祖師ノ意ニソムケリト云々。(M 勉本、二三五～二三六頁)

²⁰ 「一切ノ善悪スヘテ。思量スルコトナカレ」、「別ニ工夫ナシ。放下スレハ便是ナリ」(M 勉本、二三五頁)。

一切の分別妄想を手放すことで、心の中に仏法・世法といった二元対立的な思いが何もなくなくなった状態を「本分の田地」と言うのかという問いに対して、夢窓は達磨の作だと伝えられる『二入四行論』と、それに対する大慧宗杲（1089-1163）の評釈を引用して答えとした。

諸々の対象を手放して、内心が少しも動じない状態は、あくまでも悟りに入る方便門であり、もしこのような境地を真実の悟りだと思えば、それは祖師の本意に背くことになると思われている。

さらに『夢中間答集』の第69段では、「イマタ本心ヲサトラサル人。身心スヘテ滅盡シテ空寂ナル處ヲ。眞實ノ佛法ナリト思ヘル人アリ。此ハ是二乗ノ滅盡定。外道ノ非想定ナリ」(M 勉本、三五〇頁)と論じられており、身も心もすべて滅し尽くした空寂な境地を二乗の滅盡定や外道の非想定だと位置づけ、それは大乘の極致とは異なると見なしていた。

これまでの検証を通じて、『二十三問答』の基本的な思想内容は『夢中間答集』のそれと大きく異なることが窺えよう。

4.3 有漏・無漏の善根についての見解の相違

『二十三問答』と『夢中間答集』は基本的な思想内容において大きく異なるのみならず、一部の共通な論題に関しても異なる見解を示している。ここでは「有漏・無漏の善根」の事例に着目して、両書の違いを検討する。

『二十三問答』と『夢中間答集』は両書とも有漏・無漏の善根について論じている。まず『夢中間答集』では、有漏・無漏の善根について次のように説明している。

善根ヲ修スルハ、福報ヲ得ヘキ業因ナリ。漏者煩惱ナリ。人天ノ福報ヲ求テ善ヲ修スルハ、貪欲ノ心ヲ起セルカ故ニ、コレヲ有漏ノ善根ト名ツケタリ。一善ヲ修シテモ、世福ヲハノソマス、偏ニ無上道ノタメニ、廻向スルヲハ、無漏ノ善根トイヘリ。善根ニ有漏無漏ノ差別アルニハアラス。若善ヲ修スル人ノ心、有漏ナレハ其修スルトコロノ善根皆有漏ノ福業トナルナリ。(M 勉本、一五～一六頁)

上に引いた『夢中間答集』の文章は有漏・無漏の善根について明確な形で定義づけている。善根を修することは福報を得るための業因であり、漏

とは煩惱であると解釈されている。そして有漏の善根について、人間界や天界の福報を求めるために善を修することは、貪欲の心を起こしているの
で、これを有漏の善根と名付けるのだと解説された。

有漏の善根に関して『二十三問答』では次のように説明している。

人のいみしくさかへたるをうらやみ、又は後の世にも人と生れば、國所領おほくもち、しからずは浄土に生れてたのしみをきはめばやとて、經を讀み佛を拜み、寺をつくり堂をたて、布施をなし供養をのぶるを、有漏の善と申し候。結縁はくちすまじく候へども、是れはわろく候。一ふさの花をさゝけ、一ひねりの香をたきても、わか心法界即佛なることを知らしめ、縁をもむすばしめばやとねかひてなすを、無漏の善とてたつとき善根とは申す也。(至本、二四～二五頁)

『二十三問答』では具体例を示すことにより有漏の善根について解説を行った。意味内容から見れば、前に引いた『夢中間答集』の解釈とは特に不一致は存在しない。しかしながら、有漏の善根に対する姿勢においては両書の間に大きなギャップが存在する。

『二十三問答』では、「有漏の善とて、一むきにきらひすつべからず、繪にかき木にてつくりたる佛を見、一句一偈の御法をきく事、その縁くちずして、利益多く身なし、心に思ふ一たびその報なしといふことあるべからず」(至本、二五頁)と説き示されるように、有漏の善といってもひたむきにそれを嫌うべきでも、なげ捨てるべきでもない。絵に描かれ木で作られた仏を見たり、一句一偈の仏法を聞いたりすることは、その縁は衰えてむなしくなることがなく、もたらす利益が多くある。身に行い、心に思うことは、その報がないというのが一度もないはずであろうと説かれている。従って、有漏の善根を完全に否定はせず、仏との結縁や善業によりもたらされる利益を認める姿勢を取っている。

それに対して『夢中間答集』の第二段では、「福ヲ祈ラムタメニ佛神ヲ帰敬シ、經咒ヲ誦持スルハ、結縁トモ成ヌヘケレハ、ユルサル、方モアルヘシヤ」(福を祈らんがために仏や神を敬い帰依し、經文や陀羅尼を唱えるのは、仏や神との縁を結ぶことになるであろうから、許されても良いのではなかろうか)(M 勉本、一二頁)という問いに対して、明らかに否定的な答えを出している。

世福ヲ求ムルホトノ愚人ハ、トカク申スニタラス。タマヽヽ人身ヲ得テ、アヒカタキ佛法ニアフテ、無上道ヲハ求メスシテ、アタラ經咒ヲ誦持シテ、世福ヲ求ムル人ハコトニ愚ニハアラスヤ。……タトヒ佛法ヲ修行シテ、自モ菩提ヲ證シ、亦衆生ヲ度セムト、大願ヲ發セル人タニモ、若佛法ニオイテ、愛着ノ情ヲ生スレハ、自利利佗、トモニ成就セス。況ヤ我身ノ、出離ノタメニモアラス、亦衆生利益ノヨシニモアラス、タヽ世間ノ名利ノタメナル、欲情ニテ佛神ヲ帰敬シ、經咒ヲ讀誦セハ、イカテカ、冥慮ニカナハムヤ。（M 勉本、一三頁）

『夢中間答集』では善業を修行することは、どこまでも無上の菩提を求め、自らも悟りを開き、また衆生をも済度しようという願心に貫き通されている。我が身の解脱のためでもなく、衆生を利益するためでもなく、ただ世間の名利を獲得したいという欲で仏や神を敬い帰依し、經文や陀羅尼を唱えるのは、どうして神仏の思慮にかなうことができようか、と答えた。かくして、神仏との結縁になるからといって有漏の善根を認めるような考え方は『夢中間答集』では一蹴されたのである。

また無漏の善根についても、両書の解釈に立場の違いが見える。

『二十三問答』では、自身の心の法界が取りも直さず仏であることを知らせるために縁を結びたいと願って一束の花をささげ、ひとつまみの香を焚くならば、それが無漏の善根という尊い善根なのだと解釈されている（至本、二五頁）。他方で、『夢中間答集』においては、一つの善を修めても世間の福報を望まず、ひたすら無上道²¹のためにふり向けるのを無漏の善根と言うと解釈される（M 勉本、一五頁）。そして善根に有漏と無漏の差別があるわけではなく、善を修める人の心に有漏心と無漏心との違いがあるから、「有漏の善根」と「無漏の善根」との区別が生じるのだと説明される（M 勉本、一五～一六頁）。さらに両書では有漏心と無漏心について詳細な説明が施されている。教門では唯有漏心・唯無漏心・亦有漏亦無漏心・非有漏非無漏心という四種の区別を引いた上で、『夢中間答集』では総じて有漏・無漏に分けることにし、凡夫・外道のみならず、二乗・菩薩にさえも有漏心があるとされる。ただ世間の福報を求めず、小乗の涅槃を

²¹ この無上道は、『夢中間答集』では無上菩提とも言い、本有清淨の覺りを契証することを意味する（M 勉本、二〇四～二〇五頁）。

も求めず、ひたすら無上の菩提を求めて修行することが無漏の善根だと解釈されている(M勉本、一六～一七頁)。

総じて言えば有漏・無漏の善根について行われた解釈の明晰さにおいて、両書の差異を感じ取れるだけでなく、施された解説から両書の立場の違いも見受けられる。『二十三問答』では善業を修行するのは「仏の心＝ぬしなき法界」に行き着くのに対し、『夢中間答集』では本有清浄の覚りという無上の菩提に回帰するためであった。

五、結び

本稿では、夢窓疎石に帰せられる『二十三問答』について、その伝本と思想内容という二つの側面から検証を行い、『二十三問答』が果たして夢窓の真撰であるか否かについて再考した。

まず、『二十三問答』の伝本について確認を行った。同書は江戸時代の写本・木版本が複数現存しており、その変遷は大きく三つの段階に分けることができる。(1) 元和四写本がテキストの雛形に一番近いと考えられるが、この写本には「二十三問答」という題名が付されておらず、しかも夢窓疎石に関連付けられる情報が皆無である。その後、(2) 元和寛永古活字版や正保二版・正保五版をはじめとする版本が続々と世に出されていく。一部の版本については、筆者は残念ながらまだ目にする機会に恵まれていないが、現在調査できた伝本に対して検証した結果、次のことが判明した。(遅くとも)慶安元版からは、元和四写本にあった23則の問答に続いて、4則の法語が附加されて一冊となし、そのテキストに「廿三問答」という書名を付して発行された。その新たに附加された4則の法語には、夢窓と関連する内容があった。さらに、(3) 安永七版からは、それまで流布していた二十三問答(問答23則・法語4則)と沢庵禪師五十首和歌とを合綴して一冊となされた。そしてこの合本は、発行する本屋により、「二十三問答」、「心源悟道二十三問答 並山姥話 澤庵禪師注入」、「夢窓国師問答書并法語」などといった様々な外題を付けられて流通した。同書が夢窓国師こと夢窓疎石の著作と銘打たれたのは、この頃からであろうと推定される。

続いて本稿では、『二十三問答』の思想内容について概観した上で、同書を、夢窓の著述であることが確実な『夢中間答集』・『谷響集』という二つの和文の著作と比較した。その結果、『二十三問答』は『夢中間答集』・『谷

響集』とは全く異なる用語体系を使っているのみならず、基本的な思想内容から具体的な論述まで大きく相違していることが明らかになった。したがって、この著作を夢窓の真撰と考えることは困難であろう。

ただし、『二十三問答』では『夢中間答集』にも見られる複数のテーマについて論述が行われており、後者が使用する「第二の月」や「夢幻」などの譬喩も用いられる。そこから、この仮名法語の撰述者が『夢中間答集』を念頭に置いていたことが窺い知れよう。

『二十三問答』は江戸初期に撰述された可能性が高いが、その成立に関してはまだ確実なことが分かっていない。本書が夢窓の真撰とは認めがたいものの、少なからぬ写本や版本などが現存していることは、その受容度の高さを示している。江戸期には名僧に仮託した一連の作品群があるが、その仏教思想史における意義を考えるのは今後の課題としたい。

〈附記〉

本稿は2022年3月に東京大学大学院人文社会系研究科へ提出し、同年9月に学位が授与された博士論文『夢窓疎石の研究』の第四章「伝夢窓疎石撰『二十三問答』について」に若干の補訂を加えたものである。なお、同内容に基づく口頭発表「伝夢窓疎石撰『二十三問答』について」を第11回東アジア仏典講読会（東京大学東洋文化研究所、2022年5月28日）で行った際に、駒澤大学石井修道名誉教授、駒澤大学小川隆教授、国文学研究資料館ダヴァン・ディディエ准教授、東京大学東洋文化研究所柳幹康准教授より貴重なご意見を賜った。その旨をここに記し深謝申し上げる。

〈参考文献〉

〈一次文献・略号〉

『二十三問答』、元和四（1618）年写本、駒沢大学図書館電子貴重書庫
<http://repo.komazawa-u.ac.jp/opac/repository/collections/?lang=0>
（2021年8月5日参照）。略号＝元和四版駒沢本。

『二十三問答』、慶安元（1648）年版、駒沢大学図書館蔵本。略号＝慶安元版駒沢本。

『二十三問答』、万治二（1659）年版、駒沢大学図書館蔵本。略号＝万治二版駒沢本。

『二十三問答』、万治二（1659）年版、東京大学総合図書館蔵本。略号＝万

治二版東大本。

『二十三問答』、寛文六（1666）年版、駒沢大学図書館蔵本。略号＝寛文六版駒沢本。

『二十三問答』、安永七（1778）年版、駒沢大学図書館蔵本。略号＝安永七版駒沢本。

『二十三問答』、山田孝道・森大狂校訂『禪門法語集』上巻（復刻版）、東京：至言社、1973年。略号＝至本。

『二十三問答』、山田孝道校訂『校補点註禪門法語集』上巻、東京：光融館、1921年。略号＝光本。

『二十三問答』、「禪宗」編集局編纂『校訂箋注 禪門法語全集』第四巻、京都：貝葉書院、1896年。略号＝貝本。

夢窓疎石『夢中間答集』、佐藤泰舜校訂、岩波文庫、1934年。略号＝M岩本。

夢窓疎石『夢中間答集』、『古典資料類従5・夢中間答集 付谷響集』、東京：勉誠社、1977年。略号＝M勉本。

夢窓国師『夢中間答集』、川瀬一馬校注・現代語訳、東京：講談社、2000年。略号＝M講本。

夢窓疎石『谷響集』、康永3年（1344）頃刊、内閣文庫蔵本、国立公文書館デジタルアーカイブ <https://www.digital.archives.go.jp/img/1271483>（2021年9月10日参照）。略号＝K内閣本。

夢窓疎石『谷響集』、鷲尾順敬編輯『国文東方仏教叢書』第三巻法語部、東京：東方書院、1925年。略号＝K東仏本。

夢窓疎石『谷響集』、『古典資料類従5・夢中間答集 付谷響集』、東京：勉誠社、1977年。略号＝K勉本。

〈二次文献〉

川瀬一馬 [1965] 「夢窓国師の仮名法語（上）－夢中間答集と谷響集」『書誌学』2：1-16

川瀬一馬 [1966] 「夢窓国師の仮名法語（下）－夢中間答集と谷響集」『書誌学』3：1-9

恋田知子 [2009] 「陽明文庫蔵『道書類』の紹介（六）『〔二十三問答〕』翻刻・略解題」『三田國文』（三田国文の会）50：32-53.

国書研究室 [1989] 『国書総目録』補訂版、東京：岩波書店

竹貫元勝・熊倉功夫 [2012] 『夢窓疎石』, 東京: 春秋社
柳田聖山 [1977] 『日本の禅語録七: 夢窓』, 東京: 講談社